

梅光型PBLが受講学生に及ぼす効果

—— 教員へのインタビュー調査から ——

真 田 穰 人¹⁾
赤 堀 方 哉²⁾

要 旨

本研究では、導入当初から継続的に梅光型PBLを担当している教員にPAC分析を行い、梅光型PBLが受講学生に及ぼす効果について検討を行った。その結果、梅光型PBLでは地域企業と連携し、大人数のゼミ形式による課題解決が行われるなかで、協働的課題解決能力、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力等の伝える力が向上する可能性が示された。また、PBLのなかで社会や企業、地域や大人と出会い、そして社会そのものを体験的に学ぶということ自体が学習の成果であるとともに、先述した力の要因となっている可能性が示された。さらに、学生の主体的なキャリア形成に寄与している可能性が示唆された。一方、それらの成果を継続したり、全てのゼミで共有したりするためには、担当教員が学生やチームのアセスメントを行い、必要最低限で適切な介入を行い、見通しをもって授業を展開する必要があるため、企業連携PBLの授業スキルの共有が課題となることが示された。

キーワード：PBL，企業連携，産学連携，教育効果

I 問題と目的

2023年6月に「第四期教育振興基本計画」が閣議決定された。高等教育においても、社会の持続的な発展を生み出す人材養成を行っていくために、「正解主義」から脱した授業改善を行っていくことが求められ、課題解決型学習（PBL）等によるアクティブ・ラーニングの充実などに取り組む必要があるとされている。日本の大学においては2000年ごろからPBLが普及され始めたとされている（山口，2017）。文部科学省によると大学におけるPBLの導入率は2011年度の

1) 兵庫教育大学大学院 学校教育研究科

2) 梅光学院大学 子ども学部

20.8 % (文部科学省,2013) から 2021 年度に 42.4 % (文部科学省,2023) に増加しており、今後
も PBL の普及をより促進していくことであろう。

本学が所在する山口県では、「企業と教育機関が連携して取り組む課題解決型の教育プログラ
ムの実施に向けた環境整備」を目的として、2018 年度より PBL の普及を促進している。山口県
の平成 30 年度予算において PBL を含む「山口県の明治 150 年記念 未来へ繋ぐ人材育成事業」
に約 3000 万円が計上され、県として PBL コーディネーターを雇用し、PBL シンポジウムを開催
するなど県内大学の PBL 活動を支援している (山口県, 2018)。その後、所管部署、予算額等は
変化しながらも、2023 年度においても県の支援は続いている。このような山口県の積極的な取
り組みの背景には、山口大学が 2015 年に国際総合学部を設置したことが挙げられる。ここでは、
従来の卒業論文に代えて、「企業や自治体と連携したプロジェクト型課題解決研究」を必修化し
全学生が取り組むことになった (山口大学,2014)。この山口大学国際総合学部の PBL をモデル
にしなが、山口型 PBL として県内大学に普及を図っていると言える。山口型 PBL の特色として、
①パートナーと覚書を交わす、②企業から資金提供を受ける、③教員の専門性にはこだわらない、
④単位化する、⑤コーディネーターが介在する、などが挙げられている (福屋, 2020)。これら
の特色を大まかな合意として、各大学がそれぞれの実情に合わせてかねてより柔軟に運用されて
いる。

さて、本学では「オール・アクティブラーニング宣言」を行い、「自分の考えを人に伝える力」、
「周囲と協働する力」、「課題を発見し、解決する力」(梅光学院大学,2023) の育成に取り組んで
いる。このプログラムの中心の一つが PBL 型ゼミである。本学では、2020 年度より必修の 3 年
ゼミをすべて PBL 型としており、約 300 名の学生が 20 程度のプロジェクトに分かれて実施して
いる。また、本学は文学部と子ども学部の 2 学部の大学であり、学生の専攻も教員の専門も、経
済やビジネスは少なく、文学や語学、教育学に偏っている。そのため、提携企業の業種やニーズ
と学生・教員の専門性が一致することは少なく、③の教員の専門性にこだわらない PBL の担当
が不可避となっている。したがって、山口型の PBL を踏襲しながらも、梅光型 PBL は① 3 年生
全員が必修として取り組む、②教員、学生の専門性にはこだわらない、③ 1 プロジェクトが 20
名程度の比較的大人数である、と定義することができる。

このように、組織として PBL に取り組んでいることを、直接に学生と向かい合う教員がどの
ように受け止め学生と向かい合っているのか、また、PBL を通した学生の成長をどのように評価
しているのかを明らかにしていくことは、PBL の教育効果を高め大学教育の質保証に取り組んで
いくためには肝要なことであると考えられる。

そこで本研究では、連想刺激に基づいての自由連想や多変量解析を援用して、操作的・客観的
に個人別にイメージ構造を分析することができる PAC 分析 (内藤, 2002) を用いて、長年梅光
型 PBL 実践を担当してきた教員を対象にインタビューを実施し、梅光型 PBL の成果と課題につ

いて明らかにすることを目的とする。少数事例であっても、継続的に実践している教員の視点から本学で実施されている梅光型PBLの効果の構造分析ができる可能性があり、これまでの実践の成果と課題を検討できると考えられるからである。

II 方法

1. 調査協力者：調査協力者は、研究の趣旨および参加に同意した、梅光学院大学においてPBL導入当初から実践に携わった教員2名（A, B）であった。

2. 調査時期：2023年2, 3月

3. 手続き：面接は第1著者が担当した。連想刺激としては、以下のような刺激文を提示するとともに、口頭で読み上げた。

「あなたは、企業と連携した本学3年生PBLの学びが学生に及ぼす効果について、どのような印象をもっていますか。どのようなことを学生が学ぶことができたと感じていますか。また、どのような力を学生が身につけることができたと感じていますか。頭に浮かんだ文章やイメージや言葉を思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」

ついで、内藤（2002）を参考に、用意したカード（縦3cm, 横9cm）に想起させた順に連想内容を記入させた。その後、重要だと感じられた順に番号を記入させた。次に項目間の類似度距離行列を作成するために、1：「非常に近い」～7：「非常に遠い」の7段階尺度で評定させた。そして、作成された類似度距離行列に基づき、ウォード法でクラスター分析を行った。第2回の面接では、以下の手順で、デンドログラムの結果について調査協力者のイメージを聴取した。

まず、調査協力者がまとまりをもつクラスターとして解釈できそうな群ごとに各項目を読み上げ、項目群全体に共通するイメージやそれぞれの項目が併合された理由として感じられるものについて質問した。その後、群間比較させてイメージや解釈の異同を聴いた。さらに、デンドログラム全体のイメージや解釈について報告させた。これらの作業に続いて、各連想項目単独でのイメージがプラス、マイナス、どちらともいえない（0）のいずれに該当するのかを回答させた。

III 結果と考察

1. 調査協力者Aの結果

重要順位、クラスター分析及び単独イメージの結果は、図1の通りであった。重要順位を1/3まで取り上げると、①社会とのつながり、②企業で働くことのイメージ、③チームで働くということ、④計画をたてて働くということ、学外に出て実際に企業や社会とつながるなかで、働くことそのものを体感できることに効果を感じている。

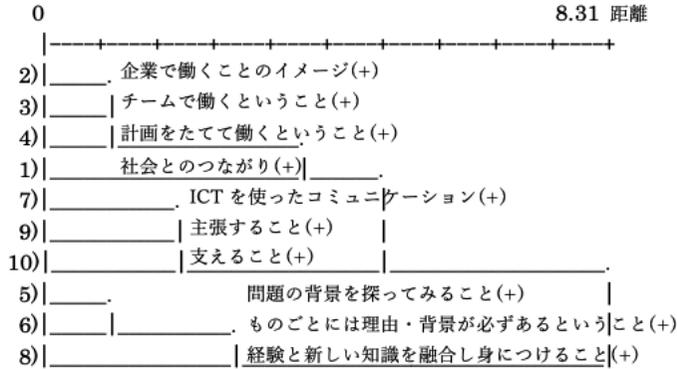


図1 調査協力者Aのデンドログラム

- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後の（ ）内の符号は単独でのイメージ

(1) 調査協力者Aによるクラスターの解釈：抜粋

(a) クラスター1は、「企業で働くことのイメージ」～「計画をたてて働くということ」の3項目：実社会で働くということがポイント。実際にプロジェクトを作ったりチームに入ったりするなかで、チームを作って働いていくということの重要性を学生の間で経験できる、学べると感じている。中心的な存在になった学生たちは頑張っていたけど、負担が偏っていて、周りの人もはっきりしてほしいなと思うこともあった。学生は、実際に一緒に活動する場面になるとみんないい顔で活動をする。一方、準備や裏でやってこななければいけないことは、中心メンバーしかやっていないということも見られる。責任感とか役割意識をどうやって芽生えさせたらいいのかなというところは、答えはなかなか出てこない。

学生によってはやるべきやらないときのムラみたいなのがある。それはコンスタントに今週は何をする、次の週には何をするというように計画をたてて、それを誰がするのかということを確認にすることで、ある程度解決できるようになる。将来、どんな仕事をしていくかわからないけど、3年生ぐらいの間にアルバイト程度の役割ではないところで、少しでも疑似体験しておくことは大事。

(b) クラスター2は、「社会とのつながり」の1項目：これは、PBLが地域社会との関連があるということ。連携する相手は企業だけど、その企業は地域社会もなんとかしたいと考えている。企業もそうであるように、学生も地域や社会とつながるなかで問題を考える必要がある。そうでないと、活動になっていかない。例えば、社会でどういうリソースがあるかとか。社会につながって生きているということが、この授業で感じられるのではないか。ダイレクトに地域の人に会ったりするので。普段の生活だと年齢を超えて様々な人と会うことはほとんどないと思うけど、

地域とか社会の課題を解決するなかで、年配の方とかあるいは逆に、地域に幼稚園があったら幼稚園児とか、いろいろな人と出会う。これから学生は社会にでていくけど、会社という組織だけじゃなくて地域や日本全体、世界のなかで自分もつながって生きていくし、その点を意識づけられるのかなあと感じる。

(c) クラスター3は、「ICTを使ったコミュニケーション」～「支えること」の3項目：これはコミュニケーションについて。チームワークのなかでコミュニケーションをとるときにICTが重要になる。また、自分の考えていることを主張することは大事になる。支えることというのは、主張する学生がいたとして、それに対する反応も大事であるということ。何がよくてどこを共感できたのかということ言葉を残していくことで、プロジェクトが進んでいく。お互いのことを考えたときに、きちんと反応して発言そのものに責任をもって動くことが大事。LINE等のプライベート空間でするのでなく、授業の中の公式のコミュニケーションを使うことで責任が生まれるし、役割意識も生じる。最初に躊躇していた学生もだんだんできるようになるし、それによって活動が動いていく。コミュニケーションの量とプロジェクトの進行はかなり比例する。ICTを活用することで、タイムラグはあるけど、普段授業ではしゃべらない子も主張したり反応したりできる。対面じゃない場面でコツコツと働いたり、伝えてくれたりすることもある。

(d) クラスター4は、「問題の背景を探ってみること」～「経験と新しい知識を融合し、身につけること」の3項目：パートナー企業からどうしてその課題を与えられたのか、その背景を探ることからはじめる必要がある。例えば地域の過疎化について考えるときに、学生は田舎にはいろんなことがないとかいうけど、どうしてそうなったのかを考える必要がある。これを作ればいい、あれをすればいいと言うけど、それがどうしてできていないのかを考えないといけない。これまでされてきたことをまとめないと新しい提案は出てこない。学生のアイデアがほしいと言われるのは事実だけど、ぱっと考えた思いつきがほしいわけじゃない。背景を知った上で、学生だから柔軟な考え方があるよねというところを期待されている。地域の方と同じ土俵に立つところまでいかないといけなくて、そこからの瞬発力や、そこからの柔軟性というところが学生に期待されている。

(2) クラスター間の比較：結果の考察や論考に関わる主要なもののみ掲載。

(a) クラスター1とクラスター2の比較

空間、フィールドが1の方は狭い。2は広い、包括的な概念。1は職業に関すること。2は職業だけでなく、人間が生活するときに一人でなく、社会で生きているという部分。それを意識したほうがよいということ。

(b) クラスター1とクラスター3の比較

働き方ということで、関連性がある。両方働くこと。そのなかで1は特にチームワークや計画

性に関すること。3はコミュニケーションに関すること。

(c) クラスター1とクラスター4の比較

1も4も働くということ。仕事をしましょうというときに、ゴールに向けてとにかく頑張っ
て働くのが1としたら、4はそれまでのことをちゃんと知りましょうという過程のこと、1を支
える力のような部分。

(d) 全体について

働くキャリアデザイン的な要素が大きい。アルバイトと正社員として働くことの違いつて何か
ということにつける。与えられた目の前の仕事だけしたらいいというわけでない。アルバイトで
も何でこの時給がでてくるか、売上げのなかでどれだけ人件費がでていってというようなこと
を考えるのが正社員の人たちの働きなので、そういうことのなかで、私たちは経済活動をやって
いて生きていっているよという、その中にみなさんは入っていくんだよねということ学ぶ機会な
のかなと。

今やっているインターンシップではそこまで感じないのではないかと思う。1日とか2日で終
わるインターンシップはただの見学。やっぱりプロジェクトを一つするだけでも、相当のことを
考えると思うので、お金もついているし。かなりそういうものに近い。それを先取りして大学生
の間に1回でも2回でも体験できるのは企業連携型PBLの最大の魅力である。

2. 調査協力者Aについての考察

はじめに、それぞれのクラスターの内容について吟味した後で、クラスター間の関係や全体的
特徴について考察する。

(1) クラスター1：梅光型PBLのなかで、連携企業と関わりながら、実際にチームでプロジェク
トの課題解決に向けて取り組むことで、「チームで働くということ」、「計画をたてて働くという
こと」を体験的に理解し、「企業で働くことのイメージ」をもつことができる。これらは、*<創造
的な労働の擬似体験による勤労観の形成>*を示しているといえよう。

(2) クラスター2：地域社会とのつながりのある連携企業と、その企業の課題解決に向けて取り
組むことは、連携企業だけでなく、地域社会や「社会とのつながり」を感じることにつながる。
このクラスターは、*<社会の中で生きていることの意識化>*と命名することができよう。

(3) クラスター3：長期間、様々な場所で取り組みが行われる梅光型PBLでは、プロジェクトの
推進にコミュニケーションをとることが欠かせない。課題解決のためにチームの中で一人一人が
「主張すること」、またチームの仲間の主張に反応し「支えること」が重要になってくる。そのた
めには、対面のコミュニケーションだけでなく、「ICTを使ったコミュニケーション」の活用も
有効である。そこでこのクラスターは、*<働くなかでのコミュニケーションの重要性>*と命名す
ることができよう。

(4) クラスタ 4:PBLでは、表面的に問題をみるだけでは、課題解決には至らない。まずは「問題の背景を探ってみること」を行う中で「ものごとには理由・背景が必ずあるということ」を知り、そのうえで課題解決に取り組むことで、「経験と新しい知識を融合し身につけること」にながっていく。このクラスタは、＜課題解決のために必要な熟慮＞であるといえよう。

(5) 全体として：調査協力者Aは、学生が長期間、連携企業や社会と関わり、ときには実際に課題を体感しながらその解決に向けてプロジェクトに取り組むことで、チームで働くことや計画的に働くこと等企業で働くことのイメージをもつことができると捉えていた。また、それと同時に社会のつながりを感じながら生きるということを考えることにもつながると感じていた。その点は、通常の大学の授業や短期間のインターンシップでは得ることができない梅光型PBLの学びの効果であると言えよう。また、実際にチームで課題を解決していく際には、主張することやチームの仲間の主張を支えるなど、活発な議論や課題解決のための話し合い促進のためのコミュニケーションが重要となり、そこで、より実践的なコミュニケーション力がつけられると考えていた。さらに、大学におけるPBLということで、研究的な視点から問題の背景を探るとともに、PBLの特徴である実践のなかで経験したことで知識を融合することで、課題を解決するとともに、社会に出たり就職したりしたときに必要な実践力を身につけることができると捉えていた。実践知を身につけることが梅光型PBLの最大の効果と言えるだろう。

3. 調査協力者Bの結果

重要順位、クラスタ分析及び単独イメージの結果は、図2の通りであった。重要順位を1/3まで取り上げると、①自ら取り組む、②責任、③目的の大切さ、④大人と話す、で、グループを活用するPBLの仕組みの中で学生が自律的に学習に取り組む、その成果を発信できるようになる点に効果を感じている。

(1) 調査協力者Bによるクラスタの解釈：抜粋

(a) クラスタ 1は、「責任」～「グループの中で自分を活かす」の5項目：ゼミの中で具体的に取り組んでいることのまとめ。特に活動に焦点をあてたまとめ。ゼミという14,15人の集団で取り組んだので、協力することが学びの中で大切なこと。今の学生は仲良くしそうに見えてすぐにはできないところがある。表面上仲良くしているけど、もう一歩踏み込むことが難しい。変な平等主義がある。一生懸命したい人とそうでない人の差は必ずある。できない学生はそれでもできることをみつけていくことが大事。4月は全日程全員が参加するという計画をたてていたけど、毎日バイトに行かないといけない学生もいる。できることをやればいい。一人一人ができることをすればよい。何となくそういう気持ちみんなわかってくる。できないときに、人を責めない。自分ができることをするのがグループで取り組むということ。だんだんわかっていくという感じ。後半はグループが安定する。平等にしなくていいんだ、できないんだということが

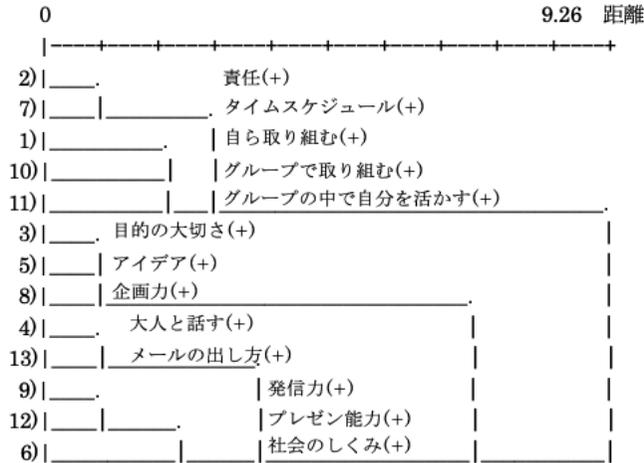


図2 調査協力者Bのデンドログラム

- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後の（ ）内の符号は単独でのイメージ

わかって。それと、責任、タイムスケジュール、個人で取り組む授業であれば、最悪徹夜すればなんとかなるという甘さがある。しかし、社会や学外の人と関わるPBLでは、徹夜しても何ともならないことがある。

(b) クラスター2は、「目的の大切さ」～「企画力」の3項目：今のゼミを選んで入ってきた人は、イベントをしたいと思って入ってくる。なぜそれをするのか、は考えていない。はじめにすぐやりたいことを言ってしまう。実現したい価値が何で、何故それをするのかを考えられない。どうしても、わかりやすいことに取り組みがち、わかりにくい部分を後回しにしてしまう。その前に考えないといけなことがある。本当に大事なことから考える必要がある。

考えただけでそれができると言ってしまう。頭の中と現実の距離感がない。まず小さく自分で実験してみる。考えるときは自由に考えたらいいけど、そのへんのバランスは繰り返すうちにだいたいよくなっていく感じがする。はじめは0か100の思考で、これはできませんとかすぐ言ってしまう。落とし所、そういうところを考えなければいけないのだと。

(c) クラスター3は、「大人と話す」～「メールの出し方」の3項目：PBLは、いろいろな大人と関わる機会、良質な大人と関わる機会である。学生が今週の授業で行ったこと等をメールで報告する、先方さんも丁寧にお返事をくれるなかで関わりながら、進められている。バイト先で大人と関わる機会も学生にはある。しかし、いろんなバイトがあるけど、よくない大人にも出会ったりする。そうではなくて、オーソドックスな働き方をしている方にきちんと説明したり、話したりする機会は貴重。お願いしたり説明したりすることはとても大事。学生の成長のために、良

い大人と関わることはとても大事だと思う。学生の論理で世の中は動いていないということに気づくようになる。

(d) クラスター4は、「発信力」～「社会のしくみ」の3項目：説明したり、誰かに伝えたりするのがこのまとめ。アウトプットはイベントだったので、そうなる発信して、届いたかどうか重要になる。学生は、はじめは告知をすると人が勝手に集まって来ると思っている。伝える時に、どこにだれにチラシを配るのか、届けたい方に届いたかどうかを考えることが大事。周りの人に協力してもらうためには、自分たちの思いをプレゼンして伝えないとだれも協力してくれない。つながっていくということと、お金を払ってやってもらう関係とは違う。ちゃんと一緒にやりましょうとお願いして、それでは協力しましょうと言ってもらえる関係、一緒に負担してくださいという関係。思いを伝えるのは大事。ちゃんとプレゼンしてくること、そのプレゼンの緊張感、やっぱり大学でするのは違う。PBLの実践では何を明確にしないといけないか、本当に伝えないといけないという覚悟が生まれる。ちゃんと伝わったら、みんな協力してくれるということ、ちゃんと手伝ってもらえるということがわかる。

(2) クラスター間の比較

(a) クラスター1とクラスター2の比較

1,2はともに普段の活動だけど、1は具体的に体を動かして実際にやっていること、動くこと、汗を流すこと、2はどちらかというと、一生懸命考えるフェーズ、1の前段階、話をしながら動き出す前の段階のこと。

(b) クラスター1とクラスター3,4の比較

1は教室の中でやっていること、学生同士でやっていること。3,4は外部の人としていること。対外的関係。

(c) クラスター2とクラスター3の比較

2は考えるフェーズのこと、3は考えたことを外部に伝えること。考えることと、外に向かって伝えていくこと。

(d) クラスター3とクラスター4の比較

どちらも伝えるということだけど、3は関係のある人とのコミュニケーション、すでに関係があってそのなかでの伝え方、4はどちらかというと、まだ関係がないけど、未知の人に伝えていくこと。

(e) 全体について

一人ではできないことを学んでいる、社会は自分だけで動いているのではなく、みんなで動いている。そういうことを学んでいくものだということ。

4. 調査協力者Bについての考察

(1) クラスタ－1：梅光型PBLは、10人以上の集団でゼミとして1年をかけて取り組んでいた。そのように長い期間で課題解決に向けて「グループで取り組む」なかで、「グループの中で自分を活かす」ために、連携パートナー企業を意識して自分の行動や役割に「責任」をもち、しっかりと「タイムスケジュール」をたてて、できることに「自ら取り組む」ことが求められる。これらは、＜協動的なグループ形成とグループ活動への参画＞を示しているといえよう。

(2) クラスタ－2：PBLでは結果が求められるが、安易に何か制作物を作成したり、行事を計画したりするのでなく、目的をしっかりと定めて、様々な「アイデア」を考えたいうでアプローチをすることが重要となる。そのなかで、「目的の大切さ」に気づいたり、「企画力」を育んだりすることができる。このクラスタ－は、＜目標志向的かつ計画的な活動＞と命名することができよう。

(3) クラスタ－3：梅光型PBLでは、課題解決のために連携パートナー企業先の「大人と話す」場面やビジネスマナーに則った「メールの出し方」をもとにメールで連絡をする場面が多くある。そこで、学生は社会人としてのマナーを学ぶとともに、様々なビジネスパーソンや社会人と出会い関係を構築していく。また、それがPBLの学びや効果そのものとなる。そこでこのクラスタ－は、＜良質な大人との出会いと関係構築＞と命名することができよう。

(4) クラスタ－4：PBLでは、課題解決に向けて説明したり発信したりする場面が多くある。そのような機会に失敗も含めて様々な経験をしながら、その経験の意味を考えたり、改善したりするためにどうしたらいいか考えるなかで、「発信力」や「プレゼン能力」が育まれていく。また、責任をもって説明をすることで、協力や援助を得ることができるというように、「社会のしくみ」を学ぶ機会にもなる。このクラスタ－は、＜課題解決のために必要な伝える力＞であるといえよう。

(5) 全体として：調査協力者Bは、梅光型PBLの効果として大きく2つのことを感じていた。1つは、グループの中で個人個人が見通しや責任をもって、主体的に活動に取り組む力が育まれることである。そして、もう一つは、パートナー企業を含む様々な組織や人から協力を得たり支援を得たりするために伝える力を高めること、その過程において多くの大人と関わること、さらに、課題解決のために目標志向や計画性を身につけていくことである。目標をきちんと定め、アイデアを出し合い、連携企業と連絡し合い、考えたことを発信していくというように、企業と連携したPBLの学習過程のなかで様々な力が必要となる活動場面があるため、そこに向かって丁寧に活動を進めることで、就職した際や社会に出たときに必要となる力を学びのなかでつけることが身につけることができると言えるだろう。

IV 総合的考察

本研究では、本学で導入されている梅光型PBLが受講学生にどのような効果を及ぼしているのかについて、教員の視点から検討することが目的であった。調査協力者の連想項目や語り、それらのクラスターから、以下のようなことが示された。

梅光型PBLでは、3年生全員が必修単位取得のために授業プログラムに参加する。また、一つの連携パートナー企業、一人の担当教員のもとに15名程度の学生が集う。そこでは普段関わりのない、あるいは少ない学生とも課題解決に向けて協働的に取り組むことが求められる。そのため、必然的にチームワークが必要となり、1年間という長期間のプロジェクトに参加するなかで自然に協働的課題解決能力が身につけられると言える。これは梅光型PBLの大きな成果と言えるだろう。

一方、学びの目的が学生の主体的な学び、自律的な課題解決であるため、教員は何らかの問題を認識したとしても必要以上にリードせずに、自分自身の問題やチームの問題に気づき解決できるように支援することになる。そのため、協働的なグループ形成とグループ活動への参画に際して学生は試行錯誤し、迷ったり悩んだり、学生同士で衝突したりする。そのような紆余曲折自体が貴重な経験であると最後には言えるのだが、学習途中においては一義的なマインドセットをもつ学生やうまくいかないチームにとっては相当の負荷がかかると言えるだろう。違う見方をすると、学生の主体的な学びの成立のために、担当教員には必要最低限かつ適切な支援が求められるため、かなり高度な授業展開スキルと学生やチームの状態のアセスメント能力が求められる。これらの授業スキル等の担当教員間の共有は、今後梅光型PBLを継続していくうえで欠かせないと言えるだろう。

協働的課題解決能力とともに、2名の調査協力者が効果として感じていたことが、協働的課題解決能力の礎となるコミュニケーションやプレゼンテーション等の伝える力の向上である。これらの力は、一般的なPBLにおいてもその効果が認められる。しかし、梅光型のPBLでは、学生同士で話し合うだけでなく、連携パートナー企業やその企業に関係する地域や人々と長期間にわたって関係を構築しながら課題を解決するため、直接的に話し合う、報告する、説明するといった場面が多くある。そのため、一般的なPBL以上に学生が切実感をもって課題に取り組むこととなり、その過程においてこれも必然的に伝える力が高まっていくということが考えられる。

一方、この伝える力の向上にも課題はある。もともと学生がもっている力やそれに影響するパーソナリティにも大きな個人差が認められる。また、調査協力者Bが述べていたように、人間関係の構築が得意でない学生も多く見られる。そのため、課題解決に向けた取り組みが進み始めると、学生自らコミュニケーションを取り合い、それらの力をより高めていくことになるが、そこに至るまでは教員がコミュニケーションがうまれるしかけをつくったり、主体性を損なわないように

配慮しながら関係作りができるような指導支援に積極的に取り組んだりしていく必要があるだろう。

調査協力者A,Bが協働的課題解決能力、伝える力の向上とともに梅光型PBLの大きな効果、あるいはそれらの力を育む要因と捉えていたことは、社会や企業、地域や大人との出会い、そして社会そのものを学ぶことができるというものであった。1,2年後には社会人としての自立が求められる3年生学生であるが、大学の授業はなかなか社会を直接的に感じることができるものは少ない。そのような学生にとって、実際に活動している企業や地域、大人や社会に触れることは、かけがえのない経験となるであろう。この部分があるからこそ、伝える力や協働的課題解決能力を向上させる必然性も生まれてくるし、PBLの学びがいややりがい、学生にとって学ぶ楽しさも生まれてくると言えるのではないだろうか。そして、このような仕組みのある梅光型PBLは、調査協力者Aが述べていたように、学生が主体的にキャリアを形成していくうえで重要な機会となるだろう。

最後に本研究の課題について述べる。本研究の調査協力者は、教員2名であった。その評価の視点には、それぞれの教員の指導観や学習観、学生観が反映されていることが考えられる。そのため、今後はより多くの教員の評価を用いて多角的な視点で、梅光型PBLの効果、成果と課題を検討する必要があるだろう。

また、学習効果を検討するためには、教員の視点だけでは不十分である。教員の視点だけでなく、学生の視点も活用して総合的に検討していくことが今後の課題となるだろう。

引用文献

梅光学院大学「オール・アクティブラーニング宣言」

(<https://www.baiko.ac.jp/university/juken/activelearning/> 2023年12月25日確認)

福屋利信(2020)『大学教授よ、書を捨てよ、街へ出よう～「プロジェクト型課題解決学習」(PBL)進化論』、太陽出版。

文部科学省(2013)「平成23年度の大学における教育内容等の改革状況について」。

文部科学省(2023)「令和3年度の大学における教育内容等の改革状況について」。

内藤哲雄(2002)『PAC分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待(改訂版)』ナカニシヤ出版

山口県(2018)「平成30年度当初予算の概要「3つの維新」への挑戦」

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/18467.pdf> 2023年12月25日確認)

山口大学(2014)「国際総合科学部国際総合科学科 設置の趣旨等を記載した書類」

(https://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~kikakuka/settikankei/h27/kokusaisougoukagakubu/h27_kokusaisougoukagakka_settuchinosyushi.pdf 2023年12月25日確認)

山口泰史(2017)「我が国におけるPBL研究の動向－大学教育での実践を中心に」『日本地域政策研究』19,34-41.